

方言使用と生活環境

—— 社宅居住者と自然発生的集落居住者 ——

神鳥 武彦・高永 茂

The Influence of Environment on the Hiroshima Dialect

—— Natives of *Shataku* and Farming Areas ——

Takehiko KANDORI and Shigeru TAKANAGA

1. はじめに

広島県東広島市高屋町は、本来、典型的な農村地帯であった。この地域に、団地や分譲住宅が建設されはじめたのは、それほど古くない。高屋町は、いわゆる「広島市のベッドタウン」として発展しつつある地域である。中でも、マツダ株式会社の社宅（以降、マツダ社宅と呼ぶ）は、大規模な団地を形成している。

社宅の県外出身者が、新しい居住地の方言をどのように受容しているかということについて、神鳥は「新居住地方言の受容」（神鳥武彦，1989）¹⁾を発表した。これは、1987年、東広島市高屋町にあるマツダ社宅の居住者を対象にして調査したものである。その結果、県外出身者の広島方言を使用する比率は、広島県出身者のそれと高い正の相関を持っていることが明らかになった。

同じ高屋町を対象にして、1988年にも同様の調査を実施した。1987年調査の対象がマツダ社宅であったのに対して、1988年調査の対象は社宅の周囲に広がる農村地域であった。この農村地域をいま「自然発生的集落」と呼ぶことにする（注1）。

今回報告するのは、1987年の調査と1988年の調査に含まれる広島県出身者の回答を比較した結果である。社宅とそれを取り囲む農村地域の住宅との間には、外見上、大きな違いがある。一方は近代的な集合住宅、一方は伝統的な農家である。そして、この違いは、外見だけに留まらず、両者の生活環境にまで及んでいるのではないかと考えられる。マツダ株式会社は、日本有数の自動車会社で、従業員も、広島県内に限らず、中国・四国・九州をはじめ広範な地域から集まっている。社宅居住者の構成も、各地の出身者が混在していた。これに対して、自然発生的集落においては、全体の八割以上が広島県出身者で占められていた。

このような生活環境の違いが、出身地の同一な人びとに対して、方言使用の上でどのような影響を与えるかということを課題にしたのが本稿である。本稿では、マツダ社宅調査と自然発生的集落調査の調査結果を比較しながら、とくに男女差の観点から分析を行なう。

（注1） 自然発生的集落の定義について、二つばかりのものを掲げる。

「集落の成立や推移の姿に視点をおく場合には、「自然発生的集落」と、「計画的開拓集落」の二大類型に分けられ、時代的特質や集落の形態とか規模に応じて、さらに細分される。」（木内信蔵，1967）⁴⁾

「しかし、自然発生的な村も、長い間には政府や農業団体などに利用され、その結果い

ろいろな影響を受けているので、今日自然村の姿をそのままとどめているものは少なく、自然村の仕事も次第にいろいろの別の集団に移されているので、昔の自然村と同じ状態のものは観念的には考えられても、実際に探すことはできにくい。しかし自然村が変型され、近代化されながらも、そこには自然村と同様農業生活や生存の必要から各種の紐帯によって結合された集団が依然として存在しているのである。」（農林統計協会，1977）⁵⁾

2. 調査の概要

2.1 1987年度 マツダ社宅調査

(1) 配布と回収

調査票は、社宅の全戸に配布した。調査票の配布と回収には「留置法」を用いた。調査票は、「御主人用」と「奥様用」の二種類を準備した。二種類の調査票の内容はほとんど同じであるが、いわゆるフェイス・シートの部分が一項目ずつ異なっている。これは、社宅の管理者であるマツダ株式会社から、女性には学歴を質問しないようにとの指導があったためである。学歴は男性のみに尋ね、女性へは学歴の代わりに結婚年数を尋ねた。

(2) 有効回収率

「御主人用」と「奥様用」とを合わせて、1150部の調査票を配布した。このうち、回収することができ、さらに有効と認められた調査票（有効調査票）は、972部である。有効調査票とは、回答無記入や記入もれの多い調査票を除いたものである。（有効調査票数÷配布した全調査票数）×100を、有効回収率とすると、84.5%となる。このうち、広島県出身者は308人で、全体の回答者の31.7%であった。

＜表1 マツダ社宅調査 広島県出身者の性別、年齢別構成＞

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上
男性 (146人)	21.2%	55.5%	19.9%	3.4%
女性 (162人)	42.6%	51.2%	5.6%	0.6%

2.2 1988年度 自然発生的集落調査

(1) 調査対象地の概要

マツダ社宅の周囲にある在来の自然発生的集落を調査対象とした。社宅の周囲といっても、高屋町は相当に広い地域を持つ町である。高屋町全体を調査対象とすることは、調査期間・費用・人員の面で不可能であった。また、全体を対象にせずとも、高屋町を代表するような地域を選べば、高屋町在来の言語使用者か

ら十分な数の回答を得られると考えた。そこで、今回の調査の対象地域は、高屋町を含む東広島市を詳細に記した『戸別記入 東広島市精図』（1988年、中国地図出版株式会社）に記載されている地域のうち、図58、59、62、63に含まれる地域とした。実際には、西高屋駅前を中心に南北に2.5km、東西に3.5kmの地域である。この地域は、高屋町の農村地帯と商店街とが両方含まれる地域である。職業の面でも多彩な回答者の得られることが期待できた。

(2) 調査票の配布と回収

調査では、上記の地域に含まれる全ての家庭を対象とした（ただし、明らかに転居者が生活していると思われるような、新設の団地は除いた。それは、今回の調査が自然発生的集落を対象とすることにしていたからである）。各家庭の「御主人」と「奥様」から回答を得るようにした。

調査票の配布と回収には、留置法と、郵送法とを合わせたような方法をとった。調査票の配布時には、調査員が戸別に各家庭を訪ね、調査の主旨を口頭で説明した後、調査票を預けた。回収は、7～10日ほど記入の期間をおいて、郵送してもらった。

配布した調査票の総数は、1010部（約505戸に配布）である。このうち、回収できた数は、695部である。回収率は、68.8%となる。

在来の集落なので、圧倒的に広島県出身者が多い。広島県出身者の回答は、588部であった（広島県出身者は全部で601人であったが、回答に記入もれがあるなどして13人の回答は全く分析に使用できなかった）。

3. 質問文の内容

今回の調査で使用した調査票は、全四節59項目から成っている。第一節から第三節までは、広島方言の使用状況を質問している。第四節では、回答者の性別、年齢、出身地などのいわゆるフェイス・シート（八項目）に関して質問している。本稿で取り上げるのは、このうち第一節で質問した項目の分析結果である。調査票の第一節には16の質問項目が含まれているが、各質問項目で扱っている方言形は、次のようである。い

＜表2 自然発生的集落調査 広島県出身者の性別、年齢別構成＞

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上
男性 (288人)	2.1%	14.6%	31.2%	22.9%	29.2%
女性 (300人)	2.3%	20.0%	32.4%	23.0%	22.3%

ずれも、広島方言で代表的だと思われる方言形を選出した。

- [1] スイバリ (皮膚に刺さった小さなとげ)
- [2] メグ (壊す)
- [3] (歯が) ハシル (歯が痛む)
- [4] (腹が) ニガル (腹が痛む)
- [5] ヨイヨ (全く)
- [6] テゴースル (<仕事を>手伝う)
- [7] ミテタ (<品物が>無くなった)
- [8] ハセル (<物の間に薄いものを>はさむ)
- [9] タウン (届かない)
- [10] フーガワリー (かっこうが悪い)
- [11] ミヤスイ (<物事を行なうに>容易である)
- [12] イタシー (<精神的にあるいは肉体的に>難しさを感ずる)
- [13] イツイキ (常に)
- [14] ハミ (まむし<蛇>)
- [15] ハブテル (怒ってふくれる)
- [16] ヤネコイ (疲れでからだがつらい<辛い>)

調査票では各節ごとに質問の仕方が異なっている。第一節では下記のような質問形式を取った。次の例は、「メグ」(物を壊す)を質問したものである。

「物をこわす」ことを「物を『メグ』」と言いますか。

1. よく言う	→ 1. 聞いたことはある 2. 聞いたこともない
2. ときどき言う	
3. 言わない	

回答者は、まず左の「1」「2」「3」のいずれかに○を付ける。そして、「3」に○を付けたならば、右の補助質問に移り、いずれかに○を付ける。ただし、「ハブテル」と「ヤネコイ」とにおいては、右の補助質問の箇所を「では、どのように言いますか」と具体的に語形を記入してもらった。

分析の段階では、補助質問の部分は、細分化していない。つまり、「よく言う」、「ときどき言う」、「言わない」の三グループにまとめている。

4. 結果と考察

マツダ社宅調査と自然発生的集落調査の回答者の中から、30歳代の回答者だけを取り出して回答結果に考察を加える。マツダ社宅調査の回答者は20歳代と30歳

代が大半を占めているのに対し、自然発生的集落調査の回答者には20歳代が少ない。このため、両者を比較するにあたり、30歳代がもっとも適当な年齢層となる。

(1) マツダ社宅調査と自然発生的集落調査の回答者の中から、30歳代の回答者だけを取り出して回答結果をまとめると、<表3>のようになる。

マツダ社宅調査と自然発生的集落調査との間ではほぼ同じ比率を示す項目が、最も多い。メグ、ハシル、ニガル、ヨイヨ、ハセル、タウン、ミヤスイ、イタシー、イツイキ、ハブテル、ヤネコイの11語は、両調査の間で差がないと言える。しかし、スイバリ、テゴースル、ミテタ、フーガワリー、ハミの5語においては、自然発生的集落調査の使用者(「よく言う」と「ときどき言う」を合わせて)がマツダ社宅調査よりも多くなっている。これら5語は、自然発生的集落において、より多く使用されているようである。このうち、スイバリとハミは、具象名詞であり、具体的な「もの」を指すときに使用される。そして、当然、その「もの」が減少すれば、それに伴って使用される機会も減ってくる²³⁾。スイバリは、手などに刺さるとげである。農作業や林業にたずさわる機会の多い自然発生的集落においては、作業中に手や指にとげが刺さることもあろう。これに対して、社宅では、材木や木製の用具を使用する機会も少ないであろう。社宅の生活では、手にスイバリが刺さることもなくなっていると考えられる。このような差が、スイバリの使用者数に反映されていると言えよう。

ハミの使用者がマツダ社宅調査で少ないのは、団地の中やその周辺には、ハミがもはや存在しなくなったためと考えられる。団地の内側はきれいに整備され、団地の周辺は宅地化が進み、商店や学校も建ち並んでいる。このような環境の中に、蛇など自然の動物は住みにくくなっている。ハミに出くわすことは、ほとんどないであろう。それに伴って、ハミの使用も減少すると考えられる。使用するだけでなく、ハミという言葉も聞くことさえ、めったに無いのではなかろうか。ハミが時々出没するような田や草むらのある場所ならば、ハミに気を付けるように警告することもあるが、団地ではそのような行為も必要なくなっている。存在しないものを呼ぶ呼称は消失しやすいという理由から、社宅居住者においてハミの使用が少なくなっていると考えられる。

全体的な傾向としては、両調査で類似の傾向を示す項目が最も多いけれども、自然発生的集落において、

〈表3 マツダ社宅調査と自然発生的集落調査の結果 30歳代の広島県出身者のみ〉
(単位は%)

	マツダ社宅調査			自然発生的集落調査		
	よく言う	ときどき言う	言わない	よく言う	ときどき言う	言わない
スイバリ	67.5	15.3	17.2	87.2	6.9	5.9
メグ	52.2	28.8	19.0	56.3	31.1	12.6
ハシル	17.3	30.9	51.8	26.5	27.5	46.0
ニガル	14.1	33.1	52.8	18.4	37.9	43.7
ヨイヨ	32.3	32.3	35.4	39.0	30.0	31.0
テゴースル	16.0	22.2	61.8	25.5	27.5	47.0
ミテタ	37.8	32.9	29.3	53.4	32.0	14.6
ハセル	68.9	23.2	7.9	76.5	18.6	4.9
タウン	81.1	14.0	4.9	82.5	16.5	1.0
フーガワリー	44.5	35.4	20.1	59.8	25.5	14.7
ミヤスイ	75.6	18.9	5.5	80.6	17.5	1.9
イタシー	39.3	38.0	22.7	49.5	33.0	17.5
イツイキ	8.1	23.0	68.9	7.8	21.4	70.8
ハミ	40.4	14.9	44.7	64.1	17.5	18.4
ハブテル	77.9	17.2	4.9	81.6	18.4	0
ヤネコイ	21.7	15.5	62.8	17.5	20.4	62.1

より多く使用されている項目もある。

(2) 二つの調査それぞれについて、男性と女性の回答に差があるかどうかを検討する。図1と図2を参照。

まず、マツダ社宅調査の回答傾向を分析してみよう。図1の使用者(「よく言う」と「ときどき言う」とを合わせる)の比率は、次の三つの傾向を示している。

【傾向1】 女性<男性 女性よりも男性のほうがこれらの方言形を多く使用(七語)

メグ、ニガル、ヨイヨ、テゴースル、フーガワリー、イタシー、ヤネコイ

【傾向2】 男性=女性 男性と女性とがほぼ同じ(三語)

スイバリ、ハシル、ハミ

【傾向3】 男性<女性 男性よりも女性のほうがこれらの方言形を多く使用。ただし、差は少ない。(六語)

ミテタ、ハセル、タウン、ミヤスイ、イツイキ、ハブテル

次に、自然発生的集落調査(図2)では、傾向1に、スイバリ、メグ、ハシル、ニガル、ヨイヨ、テゴースル、ミテタ、ハセル、フーガワリー、イタシー、イツイキ、ハミ、ヤネコイがはいる。傾向2には、ハブテル、ミヤスイがはいる。傾向3には、タウンがはいる。

回答者数を百分率に換算して比較すると、以上のような傾向が見られるわけであるが、この男女の違いがほんとうに意味を持つものなのかどうかを、統計的に検討してみる必要がある。有意差の検定には、 χ^2 検定を用いた。5%の水準で有意差があると判定された項目について、男女差があると判断した。検定の結果を〈表4〉に示す。

〈表4〉の結果をまとめると、次のようになる。

◇マツダ社宅調査で有意差のある項目は、ない。

◇自然発生的集落調査で有意差のある項目は、メグ、ニガル、テゴースル、フーガワリー、イタシー、イツイキ、ヤネコイの七語である。

自然発生的集落の居住者において、男女差を示す項目が多い。男女差に関しては、自然発生的集落のほうが顕著に現れているのである。逆に言えば、社宅居住者には、ほとんど男女差がないことになる。社宅居住者では、男女差が縮小していると考えられるわけである。

(3) 男性の回答と女性の回答とを二つの調査の間で比較する。図1と図2を参照。

両調査の女性が類似の傾向を示しているのに対して、男性間の比率に違いの大きいことがわかる。男性どうしを比較すると、スイバリからヤネコイにいたるまで、

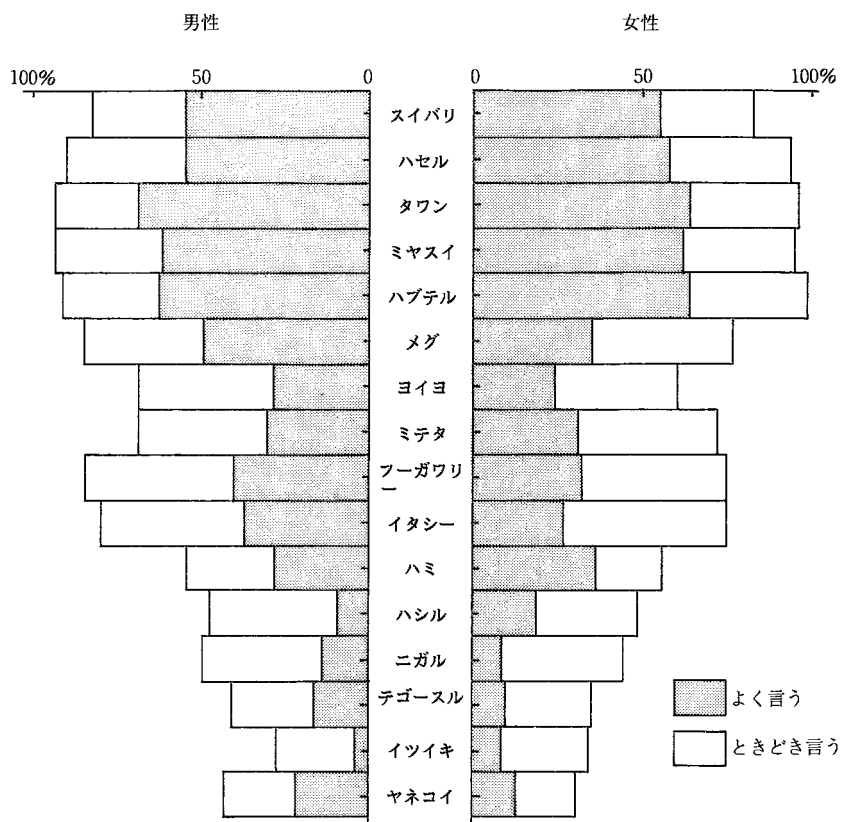


図1 男女別の回答結果—マツダ社宅調査—

ほとんどの方言形において、「よく言う」、「ときどき言う」、「言わない」の比率が相互にかなり異なっている。両調査の男性を比べると、自然発生的集落居住者の男性のほうが、これらの方言形をより多く使用していると言える。

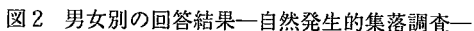
女性においては、男性と傾向が異なっている。ほとんどの項目において、マツダ社宅調査と自然発生的集落調査の回答結果が、よく似ているのである。女性の場合、社宅に住んでいても自然発生的集落に住んでいても、方言形の使用状況はかなり似かよっていると言える。今回の調査で取り上げた生活環境の違い以上に、女性には、共通語を採用すべきだという、強い力が作用していると考えられる。

上記のような男女間の相違が生まれる原因について、以下のa～dの観点で、分析を試みた。

a) 自然発生的集落の男性に特徴的な点として、次のことが挙げられる。自然発生的集落の男性には、地

元の出身者が多い。自然発生的集落調査の対象地が農村地域であることは、前に述べたとおりである。このため、男性は家を継ぐというかたちで、地元に残ることが多くなると考えられる。出身地の違いを女性と比較してみよう。なお、ここでは、東広島市出身者を地元の出身と考えている。

＜表5＞のように、男性は八割程度が東広島市の出身である。これに対して、女性の東広島市出身者は三割にすぎない。女性は、結婚時に他所から転居してきた人が多いためであろう。このように、女性は居住地を移動するという傾向の強いことが認められる。すなわち、女性は移動型の生活をしてきたと言える。女性と同じように、社宅の男性もまた、他所からこの地へ転居してきた人びとである。社宅の男性も、女性の場合と同様に移動型の生活をしてきたと言える。この点で、女性（社宅と自然発生的集落）と社宅の男性とは、類似の性格がある。ここで、自然発生的集落の男



マツダ社宅調査 自然発生的集落調査

性は「定住型」、自然発生的集落の女性および社宅の男性と女性とは「移動型」という対立が見られる。

＜表5 男性と女性の出身地の違い—自然発生的
集落調査—＞

	東広島市	その他
男・性	33人 (77%)	10人 (23%)
女・性	18人 (30%)	42人 (70%)

b) 社宅と自然発生的集落との家族構成上の違いについて注目したい。両調査の性別・年齢別構成の表(表1と表2)からわかるように、社宅の場合、20歳代と30歳代が回答者の八割程度を占めている。つまり、若い夫婦が中心となった核家族が多いのである。これに対して、自然発生的集落のほうでは、30歳代以降の各年齢層から万遍なく回答が得られている。この傾向から、自然発生的集落には若い年齢層だけでなく、さ

(注) *が有意差のある項目，－が有意差のない項目

さまざまな年齢層の人が、一家を構えていることがわかる。このことが、自然発生的集落に大家族が多いことをすぐさま意味するわけではないが、いろいろの年齢層の人びとが社会の中に混在していることは確かである。

c) 社宅の男性と自然発生的集落の男性の違いとして、職業が挙げられる。マツダ社宅調査と自然発生的集落調査の違いが、職業上の違いに起因する可能性もある。社宅は、マツダ株式会社の所有であり、居住者の男性は全員マツダ株式会社の社員であった。つまり、全員が「会社員」である。一方、自然発生的集落では、職業の種類が多様である。男性の職業の内訳は、農林業（2人）、商工業・サービス業（9人）、管理的職業（4人）、専門・技術職（17人）、技能・労務職（10人）となる。このうち、管理的職業、専門・技術職、技能・労務職が「会社員」ということになる。自然発生的集落には、会社員のほかに、農林業と商工業・サービス業が含まれていることになる。そこで、この二つの職種だけを取り出して、検討してみた。その結果、農林業と商工業・サービス業だけが、特別の傾向を示すということはいえなかった。

d) マツダ社宅調査と自然発生的集落調査との年齢構成の違いが考えられる。30歳代を30歳代前半（30歳から34歳）と30歳代後半（35歳から39歳）とに分けると、それぞれの調査の年齢構成は〈表6〉のようになる。

〈表6 30歳代の年齢構成〉

	男 性		女 性	
	30前半	30後半	30前半	30後半
マツダ社宅	51.9%	48.1%	61.0%	39.0%
自然発生的集落	32.6%	67.4%	28.3%	71.7%

〈表6〉のように、マツダ社宅調査では30歳代前半の回答者が多いのに対して、自然発生的集落調査では30歳代後半の回答者が多くなっている。年齢の高い回答者ほど、広島方言特有の語形を使用するとすれば、自然発生的集落調査の男性のほうが、マツダ社宅調査の男性よりも方言形の使用率が高いことの説明になる。

ここで問題になるのは、30歳代前半と後半との年齢上の違いが、方言使用上で意味のある違いであるかどうかということであろう。それぞれの調査の男性において、30歳代の前半と後半との間で、回答に違いがあ

るか否かを検討してみた。人数が多くないので、人数と百分率だけで比較したが、この二つの年齢層の間で明らかな違いを見せる項目はなかった。30歳代の前半と後半の回答者には、大きな違いはないようである（注2）。したがって、30歳代前半と後半の構成比の違いが、マツダ社宅調査の男性と自然発生的集落調査の男性との違いを生み出したとは考えにくい。

ここまで、出身地、家族構成、職業、年齢を検討してきた。この中で、男女間の違いを説明するのに有効な手がかりとなるものは、出身地と家族構成ではなかろうか。この二つの要素をふまえると、次のような解釈ができる。

自然発生的集落に居住している話者は、絶えず周囲の人々から広島方言を話すように要請を受けていると考えられる。この要請は、口頭で「広島方言を話さない」と要求するようなものではなく、話者が相手に身を寄せて広島方言を話したほうがよいと感じるような雰囲気の場合が多いであろう。相手に身を寄せることで意志の疎通が円滑に運ぶときには、なおさらこの要請は強まるであろう。語調上の特異性を見せないことが、方言使用の場面における要請に応えることになると考えられる。

自然発生的集落においては、かなりの数の老年層がともに生活しているため、方言を学習する機会も当然多くなるであろう。ことに家庭では、上記の要請もより強くなると考えられる。家庭は有力な「方言伝承の場」である。

社宅においては、七割が他県の出身者で占められている。他県の出身者が広島県で生活するにつれて、広島方言を次第に習得していくことは神島（1989）で述べた。他県の出身者が広島方言へ歩み寄ると同時に、広島県出身者も七割を占める他県の出身者への配慮を要求されるはずである。このとき、広島県出身者がどのような態度を取るかをいま明らかにすることはできないけれども、少なくとも広島方言の使用を差し控えることは予想できる。さらに、家族構成の上で、社宅の家庭には、年長者が少ないと考えられる。家族内に

（注2） 30歳代後半には、両調査ともまとまった人数がいる。男性の30歳代後半だけを取り出して比較したところ、やはり回答の比率に差があった。年齢をかなり限定しても両調査の回答に差があるので、年齢以外のところにこの差を生み出す要因を求めるべきであろう。

年長者がいないため、広島方言の供給源（方言学習の手本）が絶たれている。広島方言を伝承する場が変化しているのである。以上のような状況が、広島方言の語詞を忘れる原因になっていると考えられる。

二つの調査の間で男性の回答に違いのある理由を考察してきた。その結果、家庭の内外において方言伝承の場が存在しているかどうか、両者の違いを生み出していると考えられるのである。

5. お わ り に

マツダ社宅調査と自然発生的集落調査とを比べると、以下のようなことが明らかとなった。

- (1) 社宅よりも、自然発生的集落に居住している回答者のほうが、より多くの方言形を使用している。
- (2) 自然発生的集落には、地域社会の中に老年層も多く共存しているので、家庭を含め方言伝承の場が維持されている。
- (3) 社宅では、方言語詞を使用する比率のうえで、男女差が小さい。
- (4) 女性は、社宅や自然発生的集落にかかわらず、共通語化への要請を強く受けているようである。これは、女性が現在まで移動型の生活をしてきたことに関係しているのではなかろうか。
- (5) 自然発生的集落の男性には、方言を主体とした言語生活をなすべきであるという要請が強く存すると考えられる。
- (6) 社宅の男性は、女性に通じる移動型の特徴を備えている。さらに、自然発生的集落に存在するような方言伝承の場が、社宅では少なくなっている。有力な方言伝承の場である家庭も、核家族化の進むなか、その役割が変化してきていると考えられる。これらのことが、社宅の男性において方言の使用が減少している要因となっているのであろう。以上を見ると、方言使用の現実には、社宅あるいは

自然発生的集落という生活環境の差が影響しているということが指摘できよう。すなわち、社宅という生活環境と自然発生的集落という生活環境とが、方言伝承の場としての差を明確に示しているということができるのである。方言は、生活環境、言い換えれば居住地区の差に伴って、使用され、存立しているということができるのである。また、上の6項目のうち(3)～(6)に見られる男女差の問題に関しては、これまで経験知としてさまざまな予想があったものの、本稿のように定量的に実証した研究は少ない（注3）。今後、さらに、男女差の問題についても検討を加えていきたい。

【謝 辞】

本稿は、第50回日本方言研究会において口頭発表したものに加筆・訂正を加えたものである。席上、井上史雄、荻野綱男の両氏から貴重な御教示をいただいた。厚く御礼申し上げる。

調査にあたっては、マツダ社宅の皆様方ならびに東広島市高屋町の皆様方に多大なご協力を賜った。記して深謝の意を表す。

参 考 文 献

- 1) 神島武彦 1989 新居住地方言の受容 国語国文、第58巻11号。
- 2) 飯豊毅一 1974 言語使用の変遷 (1)——福島県北部地域の面接調査—— 国立国語研究所。
- 3) 高橋顕志 1985 廃物廃語と無回答 (NR) 国語学、143集。
- 4) 木内信蔵 1967 都市・村落地理学 朝倉書店 p. 26。
- 5) 農林統計協会 1977 日本の農業集落 農林統計協会 p. 8。
- 6) 神島武彦 1971 ことばの生態学 東京堂出版 pp. 61-63。

Summary

A study of differences in the speech forms of natives in Hiroshima prefecture living at two different areas revealed that male informants of farming areas maintained more dialect forms than the others (female informants of farming areas, male and female informants of *Shataku*: a company provided housing facilities). Male informants of farming areas were found to fulfill the request to adopt dialect forms. Furthermore, the results of the study from male and female informants of *Shataku* showed that a sex difference did not exist in 16 items of lexicon.

(注3) 神島 (1971)⁶⁾において「男ことばと女ことば」という一節が設けられているけれども、数量的な分析はなされていない。